チベット仏教と蔵外文献の木版テキスト

― 文化の接触と受容の観点から ―

伏　見　英　俊

Tibetan Buddhism and Xylographic Texts:

A Preliminary Survey from the Viewpoint of Cultural Interaction

FUSHIMI Hidetoshi

The ICIS joint research group for Central Asian studies selected "The Chinese Culture Viewed from a Peripheral Perspective" for their research topic, as a way to see through the cultural complexity of Central Asia, and to make clear the characteristics of cultural receptivity in Central Asia. Based on the above principle, a research plan has been drawn up.

This paper is a summary of the basic information for the ICIS joint research group, in which the author is involved, from a perspective of cultural interaction in the xylographic editions of Tibetan non-canonical works related to the Sa-skya-pa tradition.

キーワード：チベット，仏教，木版本，サキャ派

はじめに

筆者は，チベット仏教Sa-skya派研究の一環として蒐集してきた文献資料に基づき，「チベットにおける蔵外文献木版印刷プロジェクトの解明」を一つの研究課題としてきた。当該研究課題は，チベット仏教Sa-skya派に関連する蔵外文献（チベット撰述文献）の木版印刷を中心として，チベットの寺院史・地方史・王統史・伝記などの歴史資料を用いて木版本のコロフォンを解析しつつ，15–18世紀の木版印刷プロジェクトに於ける施主・出版責任者・主任校閲者等のプロジェクト構成員，並びに印刷プロジェクトの作業工程・印刷施設等を解明し，チベット文化史上における蔵外文献木版印刷の意義・役割を明らかにすることを主たる目的としている[1)]。本稿では，従来の研究成果に基づき，チベット蔵外文献の木版印刷に見られる「文化の接触と受容」という観点から，筆者が現在参画している関西大学文化交渉学教育研究拠点（ICIS）の内陸アジア班共同研究のための基本情報を整理しておくことにしたい。そこ

1）Fushimi（1999），伏見（2002）（2008a）（2008b）参照。

で，まず内陸アジア班の活動について触れた上で，木版テキスト導入に関わる文化交渉の諸相を見て行くものとする。

一　内陸アジア班における文化交渉研究

チベットやシルクロードのオアシス国家を始めとする内陸アジアの諸地域は，中国からの文化的影響のみならず，周辺地域からの多様な文化を受容して形成された複合文化圏である。筆者の専門領域であるチベットは，唐・元・明・清を始めとする諸王朝との政治的な関係を軸に，中国から多岐にわたる文化的影響を受けてきた。とりわけ，敦煌における唐との文化接触，明朝との文物の交流は文化交渉研究における重要な課題と言えよう。しかしながら，チベットの文化は，中国以外にもインド・ネパール・シルクロードのオアシス国家などの周辺地域から様々な文化を受容して形成されたことが知られている。例えば，チベットの製紙技術は中国から齎されたと考えられるのに対し，建築様式と絵画様式は中国とネパールの双方の影響を受けて形成された。今日に伝えられるチベット仏教は，インド仏教を忠実に反映したものではあるが，中国仏教の影響と見做される要素も散見される。また，チベット古来の宗教とされるポン教は，ポン教自身の伝承によればイラン起源の伝統をもつという。さらに，チベット文字は北部インド地方で使われていたグプタ系文字をモデルに作られたとされ，その後，モンゴルのパクパ文字として派生していったことが知られている[2)]。

このような文化の複合性に鑑み，内陸アジア班の共同研究では，内陸アジアにおける文化的受容の特徴を明らかにする方法の一つとして「周縁領域から見た中国文化」を検討課題として選び，研究計画を立案した。研究会では，内陸アジアの文化的受容の特徴を探るべく，文字資料並びに非文字資料を用いて，対象とする地域に中国文化の中から「何が伝わり，何が伝わらなかったのか？そして，それは何故か？」という素朴な疑問に答える形で考察を重ねてきた。この場合の中国文化とは，漢字・暦・占い・計量方法に始まり，医学・儒教・仏教，社会制度・行政制度・軍事制度・情報伝達方法，そして印刷技術・製紙技術・建築様式・絵画様式に至までのものを当面の調査対象としている。

内陸アジア班では，上述の調査研究から，個別の対象領域における「文化の接触と受容」の諸相を分析し，それが東アジア文化圏における「文化の生成・伝播・接触・対立・変容」に関して如何なる意味を持ち得るかを検討して，①文化接触の様態や類型，②新旧文化の軋轢や対立の類型，③異文化受容を特徴づける要素等を考察することを最終的な目標として研究計画を進めている。

本稿では，従来の研究成果に基づき，チベットの木版印刷に見られる文化の接触と受容という観点から，中国文化の中から「何が伝わり，何が伝わらなかったか」を把握するために，チベット国内での宗教的需要に留意しつつ，中国からの文化的影響に限定することなく，他の周辺地域からの文化的影響も考察の対象として基本情報の整理を試みた。

2）チベット文字の成立と展開については，西田（1987）参照。他の文化的要素については，スタン（1993）参照。

二　木版テキスト導入と木版プロジェクト

周知のように，チベットでは7世紀中頃のほぼ同じ時期に，中国仏教とネパール系のインド仏教が伝えられたとされる。その後，数度にわたるチベット語綴り字の改定，サンスクリット語からの仏典翻訳，大蔵経の編纂などが行われていく。かかる意味においては，異文化であった仏教を受容していく過程で，チベットの文化が構築されていった一面があると言えよう。

中でも，チベットにおける蔵外文献（チベット撰述文献）の木版印刷は，祖師の教えを後世に伝え，チベットおよびその近隣諸国に普及させることを一つの目的として推進された注目すべき事業であった。木版本の利用により，筆写に費やす労力を軽減し，筆写に伴う誤記を回避できたと考えられ，しかも木版本の普及に伴い，木版テキストそのものが標準的なテキストとして利用されるようになった事例も報告されているため，木版印刷されたテキストが後世に多大な影響を与えたことは疑いの余地がない。チベットで，いつ頃から木版印刷が行われていたかについては必ずしも明らかではないが，現在までのところ，15世紀の初め以降のことではないかと考えられている。以下では，Sa-skya派関連の木版印刷を中心として，木版印刷の導入とその後の展開を文化の接触と受容という観点から見て行くことにしたい。

1　チベット木版印刷のプレヒストリー

チベットでは国内で木版印刷が開始される以前すでに，モンゴルあるいは中国で作成された木版本が種々の機会に使用されていたことが知られている[3)]。そこでは，まずチベット人たちの木版テキストとの出会いがあり，その利用価値が徐々に認識されるにつれて，チベット国内での木版本に対する需要が高まっていったものと予想される。しかしながら，このような木版本に対する需要に対して，国内での木版技術が成熟していなかったため，近隣諸国との政治的あるいは経済的な交流を通じて，国外の木版技術に依存しつつ，木版テキストがチベットに導入されたと考えられる。その後，国内での木版技術の未成熟を克服しようとする動きが15世紀の木版本の開版へと繋がっていったと見て間違いないであろう。そのような意味では，チベットの木版文化史における木版印刷プレヒストリーは極めて重要であると言えよう。

国外における木版テキストの例としては，まずhor par maと呼ばれる木版本があげられる。チベットでは，チベット国内での木版印刷に先駆け，hor par maすなわちモンゴルにおいて木版印刷されたものが，一つの標準的なテキストとして使われていた。例えば，Sa-skya Paṇḍita（1182–1251）の主要著作*sDom gsum rab dbye*のhor par maと*Tshad ma rigs gter*のhor par maが，15世紀のSa-skya派の注釈家たちによって参照されていたことが知られる。当時のチベットでは，筆写に伴う誤記がテキストを理解する上で問題となることも少なくなかったとされ，写本の誤記を訂正するために，上述のような木版テキストが参照されたと考えられる。

また，中国では明の永楽帝の支援により，1410年に北京で最初のチベット大蔵経の木版印刷である永

3）伏見（2008），pp. 265–266参照。

楽版bKa' 'gyurが開版された。この永楽版が完成後まもなく，チベット国内で使用されるようになり，チベット人の木版テキストへの需要に応えていったと理解されよう。

2　15世紀開版の木版印刷

蔵外文献の木版印刷の中でも，15世紀にチベットで開版された二つのSa-skya派の木版印刷（旧Sa-skya版とGong-dkar-ba版）は，チベットの木版印刷史上，種々の観点からその重要性が注目される。

旧Sa-skya版は1439年Sa-skya近郊で開版された木版印刷で，Sa-skya Paṇḍitaの*Sa-skya legs bshad*，*sDom gsum rab dbye*，*Thub pa'i dgongs gsal*の三つの著作の木版本が現存する。この旧Sa-skya版はチベットにおける初期の木版印刷本の一つであり，チベットにおける木版技術の導入を知ることのできる数少ない資料である[4)]。例えば，旧Sa-skya版のコロフォンには，施主名と祈願内容に加え，校閲者，刻字担当者などの木版印刷プロジェクトのメンバーの名前が記されており，当時の木版事業の概要を知ることができる。木版印刷のプレヒストリーからわかるように，チベットの木版技術の多くの部分は，中国から齎されたと考えるのが妥当であろう。現時点では，どのような経緯で中国から木版技術が伝えられたかについては明らかではないが，旧Sa-skya版の刻字担当者の名前は，この刻字担当者が現在の中国雲南省出身の関係者であった可能性を示唆している。さらに，刻字担当者の名前を版木に刻むという中国風の習慣も見られるため，旧Sa-skya版の刻字担当者に関わる記録は中国からチベットへ木版技術が伝えられたことを裏付ける根拠の一つと見做すことができるかもしれない。

また，1450年代にはSa-skya派の祖師の著作集からなるGong-dkar-ba版が開版されている[5)]。Gong-dkar-ba版は，初期の木版本であるという事実だけではなく，18世紀に開版されたDerge版『Sa-skya派全書』の編纂者たちが，いくつかのGong-dkar-ba版を木版印刷の底本作成のための校合資料として参照していたことからも，Gong-dkar-ba版の木版本としての重要性が指摘できよう。このことは，初期の木版本が，後世の木版印刷プロジェクトにおいて，標準的なテキストの一つとして採用されたことを示しており，木版本研究上重要な例であると考えられる。ただし，Gong-dkar-ba版は，旧Sa-skya版の完成後まもなく計画された出版事業であったことを考えると，当時の木版技術では，版木の摩耗に充分対応できなかったという可能性も否定できないであろう。

3　18世紀開版のDerge版『Sa-skya派全書』

東チベットのDergeで開版された『Sa-skya派全書』は，Sa-skya派の五祖師の著作集出版を目標とし，Derge王bsTan-pa-tshe-rinが施主となって，Zhu-chen Tshul-khrims-rin-chen（1697–1774）を始めとする編纂者たちによって1736年に完成した[6)]。多くの校合資料を参照して編纂されたDerge版『Sa-skya派全書』は，その後長い間チベットでSa-skya派の標準テキストとして参照されてきたことから，『Sa-skya派全書』作成の技術水準の高さが評価される。Derge版『Sa-skya派全書』は，当時のDergeにおいて木版本の規

4）伏見（2002），pp. 52–56参照。
5）伏見（2002），p. 56参照。
6）伏見（2002），p. 60参照。

模に応じて木版印刷プロジェクトが組織され，Derge版大蔵経編纂に伴う技術力の蓄積に加え，必要な資財が投入された結果齎されたものであるが，Derge版『Sa-skya派全書』の規模と技術力は，以前の木版印刷をはるかに超えるものであった。このことから，当時のDerge地方の財力・技術力を知ることができるため，Derge版木版プロジェクトの記録は対中国交渉史研究および東チベット地域研究の分野でも重要なことがわかる。

Derge版『Sa-skya派全書』の技術水準として，蔵外文献の木版印刷史研究上特筆すべきことは，（1）Sa-skya Paṇḍitaの著作を可能な限り収録するために東チベットのKhams地方から取り寄せた稀覯本なども採用し，（2）印刻用底本作成のために8つの「著作集（写本）」とGong-dkar-ba版の木版本を参照し，さらに，（3）新しく制定された正書法に基づき新旧語彙を対照して綴り字の統一化を計ったことなどの組織的な編纂作業があげられるであろう。Khams地方から取り寄せたSa-skya Paṇḍitaに帰せられる著作は，当時中央チベットに伝えられていなかったもので，Sa-skya Paṇḍitaが東チベット経由でモンゴル布教へ赴く途中，他の仏教僧との書簡を随行者が記録したものであった。また，印刻用底本作成のために多くの写本・木版本を参照するという校合方法は，おそらく大蔵経の木版作業で培われた技術であったと考えられるが，このような校合方法が中国から齎されたものかどうかは明らかではない。一方，綴り字の統一は，祖師の使用していた古い綴り字を後世に伝えることなく，自動的に新しい語彙に置き換えてしまうという結果を招き，新たに導入された技術が伝統的な文化遺産を破壊してしまった例として指摘できるかもしれない。

最後に，Derge版の木版印刷プロジェクトの構成メンバーの「紙すき工」と「版木整備工」の存在に触れておくことにしたい[7)]。Derge版『Sa-skya派全書』における「紙すき工」の存在は，木版印刷用の紙がどこで調達されたかということを考える上で無視できない事例である。中国の製紙技術は唐代にチベットに齎されたとされるが，その後の生産状況は不明のままである。ところが，Derge版『Sa-skya派全書目録』には「紙すき工」と「版木整備工」への賃金支払いが記録されており，当時既に製紙作業と製材作業は印刻場所（Derge）の近郊で行われていた可能性が指摘できよう。ただし，同じ『Sa-skya派全書目録』には，「版木整備工」への賃金支払いとは別に「版木代」が計上されていることから，版木は印刻場所とは別の場所から調達された可能性もないとは言えないであろう。

おわりに

本稿では，チベット仏教Sa-skya派に関連する木版印刷を中心として，チベット蔵外文献の木版印刷に見られる文化の接触と受容という観点から報告してきた。このような試みを繰り返すことによって，個々の文化的要素を個々の文化交渉を通じて分析することにより，複合的な文化の体系的な理解も可能となるであろう。ただし，南詔や西夏を始めとする中国文化の影響を受けた周辺諸国とチベットとの文化接触をどのように取り扱うべきかについては，今後の課題とせざるを得なかった。

7）伏見（2008a），pp. 269–273参照。

〈参考文献〉

R. A. スタン（1993）:『チベットの文化　決定版』（岩波書店）

西田龍雄（1987）:「チベット語の変遷と文字」『チベットの言語と文化』（長野泰彦・立川武蔵編，冬樹社）所収，pp. 108-169.

伏見英俊（2002）:「蔵外文献木版印刷についての一考察」『日本西蔵学会々報』第48号, pp. 51-68.

――― （2008a）:「チベット木版印刷プロジェクトとその構成メンバー」『東アジア文化交渉学研究』創刊号, pp. 263-276.

――― （2008b）:「Kun-dga'-grol-mchogとSa-skya派仏教」『佛教文化学会紀要』第17号, pp.（１）-（11）.

Fushimi, Hidetoshi（1999）: "Recent Finds from the Old Sa-skya Xylographic Edition." *WZKS*, vol. 43, pp. 95-108.